

シンポジウム 2

次世代 TRY! リハビリプロレスリング!!

「逆風」を「チャンス」に!

阪東 祐一郎*¹, 碓井 理知*², 伊藤 健次郎*³, 軽部 孝*⁴(*¹ 株式会社 アクティブ, 作業療法士, *² 同, 言語聴覚士, *³ 同, 作業療法士, *⁴ 同, 理学療法士)

キーワード 「地域リハビリテーション」「(株)アクティブ」「利用者」「活動・参加」

はじめに

(株)アクティブは、今年で開設10周年を迎える。代表取締役の阪東をはじめ、アクティブのスタッフを交えて10年を振り返り、10年後のスタンダードを語り合った。

10年後の展望

軽部・理学療法士(以下、――の箇所) 改めまして、シンポジウムお疲れ様でした。「10年後のスタンダード」が大きなテーマでしたが、10年後の地域リハビリテーション(以下、リハ)への展望を開かせてもらえればと思います。

阪東 10年後なんて分からへん(笑)。数年先も読めないのに、10年後なんて分かるわけない。介護保険・医療保険の改正があり、いろんなことに左右されるわけなんで。ただ、この10年を振り返ると、今まで僕らが「利用者さんをなんとか外に連れ出そう!」とイベントとか、セミナーとかいろんなことをしてきて、それがうちの会社の中では当たり前になってきて、世の中でも活動・参加がいわゆるようになって。目の前にある課題というか「壁」をなんとかしようと、いろんな手段を考えて。それが形になったし、世の中の流れと一致したんじゃないかと。意外とコツコツやってきたんですよ、僕らは(笑)。

―― 意外とちゃんと考えているんだ!と(笑)。

では、今アクティブが、地域リハの現場が直面している課題って何でしょう?

阪東 「連動」というか、「橋渡し」かな? 利用者に何が必要かと考えたら、うちの会社だけじゃなくて、地域全体がうまく連動しないと。アクティブだけ考えても、看護と介護・リハビリ、通所、個々の事業に孤立感を感じるというか、利用者さんとこんなことやってみたい、あんなことやりたい思っても、まだまだ展開していきづらいと感じることがあります。それぞれの部門の橋渡しが大事やなって思っ、まず社内を整理していきたいということで、「心意気実践チーム」をつくりました。

名前はちょっと、センスないかもしれんけど(笑)。活動・参加へのアプローチや生活行為向上という見方を、スタッフ皆が同じようにもてるように、利用者の想いをあらゆる手段で実現できるよう中心チームをつくりました。

―― この方向に進んでいくんだ!というのを分かりやすくスタッフに見せるためのチーム?

軽部 そうですね。アクティブは在宅分野の看護やリハ、通所介護だけでなく、新しい事業も始めていきます。各事業が、利用者のニーズに合わせて連動できるようにしていきたい。

―― その新しい事業の中でも「業務提携クリニックの開設」については、大きな挑戦かと思えますし、なかなか考えつかないであろうアイデア。中

心となって準備している碓井さん（取締役・言語聴覚士）から、詳しくお願いできますか？

碓井 前から提携クリニックがあれば、もっといろんなことができるだろうと思って。じゃあ、本気でやろうと思ったら医師という存在が必要。さまざまな方面に相談もしたんですが、最終的に思いついたのがNさん。うちの訪問の利用者さんでした（笑）。脳幹出血の医師の方です。昔からイベントに出てもらったり、社外報に寄稿してもらったり、いろいろとやってもらってましたね。

Nさんに協力をお願いした理由は、私たちのことをよく分かってきている点と、当事者であるという点です。当事者だからこそできる支援。これって強みになるかなと思うんです。Nさんの復職は、究極の「活動」「参加」にもなるんじゃないですか。

あと、個人的な想いとしては、「雇用を安定させたい」ということがありますね。職員へよい仕事をつくり、待遇面の安定と向上を図りたいですね。自分たちの仕事が不安定な状態で利用者さんの「おもしろいこと」を支えることなんてできないと思うんです。あとは理想ですが、近江商人の『三方よし』風に「社員よし、利用者よし、地域よし」になればよいかと考えています。

「おもしろいこと」を形にする

—— おもしろいこと、といえば一番の例が「失語症漫才」ですね（笑）。就労支援でもあるし。

碓井 「失語症と片麻痺を武器にする」という逆転の発想ですね。アクティブの利用者である脳出血後遺症で右片麻痺、失語症の方と一緒にいろんな試みをしています。理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）養成校での実技モデルとして講師で招いてもらって、利用者さんがモデル代をしっかりといただいています。そして、もっと活躍できる場所探しの営業として、「失語症漫才」をしています。新人STと学園祭や学会で漫才を披露してもらってます。

本当は、就労支援という理由は後づけなんです。失語症で漫才してるって、「おもしろいんちゃう」が

先です。もっといい加減な始まりなんです（笑）。

—— でも、「おもしろいこと」をちゃんと利用者さんの収入にもつなげるという、おもしろいで終わらずに形にするというのは理想的ですね。話は変わりますが、他の新事業としては介護職員実務者研修会の開催や訪問介護ガイドステーションの設立などがあります。就労支援のカフェは2店舗目がオープンしました。

阪東 どこまで公に、具体的に出してええんやろう、と思うんですけど（苦笑）。いろんなことをやろうとすると、急には反発があるやろうとか、いろいろ考えちゃうんですよ（苦笑）。でも、やっぱり利用者さんを、とにかく自立する方向にもっていくために、もちろん自立といってもその人ができることをちゃんと日常生活でやるっていう意味で、何でもかんでも自分でやらなあかんっていうことじゃなく、利用者さんが生活の中で、地域の中で「役割づくり」ができればと思って新しい事業にチャレンジします。

まあ、堅い感じじゃなくて、利用者さんの「ちょっとした強み」を活かして「ちょっとした役割づくり」ができれば。そのサポートをするための体制づくりです。

看護やりハだけでなく、ヘルパーさんにも活動・参加の視点をもってほしいですし、そうしたヘルパーさんを育成したい。利用者さんを外に連れ出したいのなら、アクティブでガイドヘルパー事業所をすればいい。そういう考えで新事業をやっています。

でも、どれだけ事業展開をしていったとしても、その中でもセンスのある人が一歩先を行って、形にして周りを見せていってもらわないと、会社だけでなく地域全体をみても進んでいかないんじゃないかと思うんです。

—— なるほど。では、アクティブの中でも一歩先行くOT（笑）、利用者さんと沖縄旅行までしちゃう、先行くというか飛んでいってるOT、伊藤さん（人材開発室・心意気実践チームリーダー・作業療法士）にお聞きします。アクティブは、どんなこと

を「形にしてみせていく」んでしょうか？

伊藤 僕たちは、自立支援を必要としている方々のファシリテーター（世話人）になりたいですね。自立支援の観点で、社内外の人や物を有効活用して活動・参加につなげていければいいんじゃないですかね。あそこの事業所の誰だれさんにはこんなことが頼める、あの人とはこんなことができた、という「実例」をつくって行って、モデルケースとなりうる「実例」を積み重ねて、それを世の中にちゃんと発信していきたいです。

学会発表や、アクティブの公式ブログを充実させたりとか。利用者さんが、「今度あそこに行きたい、あそこに行ってこんなことがしたい！」という心意気を、すぐに形にして実現できるようにしたい。そのための体制づくりが新事業の目的になっています。そんな「アクティブ・リハビリ訪問介護ガイドステーション」をつくりたいと考えています。

活動・参加を多職種で

—— 新事業の下で事例を積み重ねて、「事例集」を出したいですね。それと、ケアマネさんやヘルパーさんとか他職種のの人たちをもっと巻き込んで活動・参加を形にしたいですね。

伊藤 あとは介護職実務者研修を開催して社内外のPT・OT・STに限らず、特に介護職の方々の人材開発をしたいですね。雇用や職域の拡大になるし、多様な雇用の形・内容があれば、その人の適性や強みを活かしたジョブマッチングができますんで。

—— それらを実践するうえで、人材開発・教育の面での課題や10年後の展望はどうでしょうか？

伊藤 まずですね、職業人。医療介護職としてここまでではできなきゃいけない、知っておかなきゃい

けないという最低限の「スタンダード」はあると思ってまして。それらの引き上げが、大きな課題と感じています。

あとは、現場で成果を上げるために何が必要か、その資質や行動指針として、「アクティブ・コンピテンシー」の運用ですね。社内でも、まだまだ周知されていないですが。仕事に行き詰ったり、悩んだりした時に戻ることができる、道しるべというか指標みたいなもの、そういう「軸」をつくって、「仕事を自分のモノにできる」、キャリア自律した職員を育成できる会社になりたいと思っています。

—— では、最後に改めて10年後のスタンダードについて阪東さんからお願いします。

阪東 やっぱり分からへん（笑）。僕ね、目の前に課題が出てこない、手段なんて分かんないんですよ。今までもそうやってきて、思い返すと目の前のこと、利用者さんのことを1つひとつ、コツコツとやってきて、今のアクティブがあるんじゃないかと。そやからそう言ったことの先に、スタンダードがあると思います。

ほんと、どんな形かは分からない。ただ、利用者さんも、スタッフも、ボランティアとか地域の人も、いろんな人が自分の強みを活かして関わっていく。そうした取り組みを1つひとつコツコツやっていくことが、理想の姿だとは考えてます。そして、そうしたことを、しっかりと形にして、収入につながるものはしっかりとつなげていくこと。そうしたことがアクティブとしての目標ですし、10年後のスタンダードになっていたら、素敵やなあと思います。

—— 10年後が楽しみです！皆さん、ありがとうございました。